

死海文書における「殺されるメシア」(4Q285)をめぐる論争

和田 幹 男

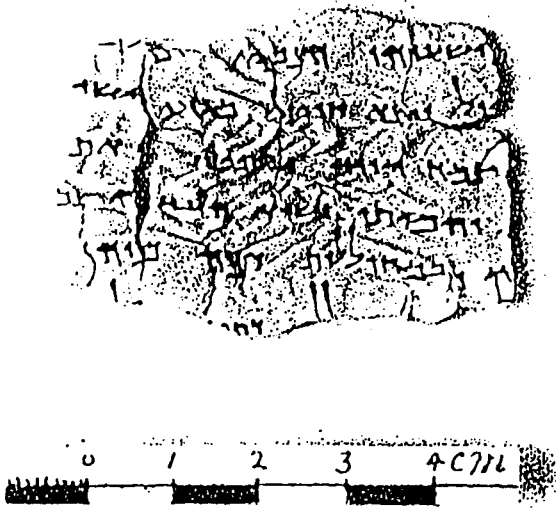
序

死海文書研究は1990年代になって急激に活気に満ちるようになった。公開が待望されていたクムラン第4洞窟出土の写本断片が研究者に近づき得るものとなったからである。1990年10月、E・トブを主軸とする国際的研究・公表体制が新たに整えられたが、その枠を超えて未公開文書の出版が相次いだ。1991年9月にはB・Z・ワコルダーとM・G・エイベッグによる第4洞窟出土未公開文書の予備的出版¹⁾、米国カリフォルニア州サン・マリノのハンティントン図書館 (the Huntington Library) によるクムラン文書の写真の公開、同年11月にはR・アイゼンマンとJ・M・ロビンソンによる死海文書の写真の出版がなされた²⁾。他方、ほとんど同時にイスラエル古物権威筋 (Israel Antiquities Authority) もユダ沙漠出土の全写本の公開を決定し、これが1993年、E・トブ編マイクロフィッシュによる死海文書の出版に実ることになる³⁾。

この研究・出版活動の過程で、新聞を通して一般人にも関心呼び起こしたのが、R・アイゼンマンとM・O・ワイズによる第4洞窟出土写本断片285 (4Q285) の解読であろう⁴⁾。彼らはここに殺されるメシアの記述があり、このメシア像は従来キリスト教独特のものと考えられていたが、そうではないとした。それはキリスト教発生以前のユダヤ教にすでにあったとし、それによりキリスト教の独自性を否定し、その起源を死海文書の宗団と同一視すべきだとの彼らの主張に根拠をもたせようとした。このような含みのある解読が広く知られることになったこともあって、この小さな写本断片はしばしば検討の対象とされてきた。1991年12月のオックスフォード・フォーラムで、

G・ヴェルメシュを座長とする研究者グループがこの写本断片を詳しく検討した。⁵⁾その結果は、ここに殺されるメシアを読みとるのはきわめて難しいということだった。他方、新聞にしか発表しなかったアイゼンマンとワイズも、その後ほかの写本断片と共に簡単な解説をつけてその訳文を発表した。⁶⁾これに対し研究者たちの反応は否定的で、それを支持するものは皆無といえよう。⁷⁾

われわれはここでこの写本断片を直接見て、可能な限りその本文を再現し、試訳を提示し、解説を試みる。その際、この写本断片にまつわる論争からその積極的な諸提言を取り入れたいと思う。



PAM 43325 より

第4 洞窟出土写本285、断片5

この写本断片は、ロックフェラー博物館蔵の3つの写真標本、PAM 41708、42370、43325に保存されている。⁸⁾最初の標本では、創世記注解の3断片と共に置かれ、ほかの2つの標本では同じ文書に属するとされる幾つかの断片群

の中に置かれている。その同じ文書は、かつては「戦いの祝福」(4Q Berakhot Milhamah)と命名されたが、それを詳しく検討したJ・T・ミリク以来、「戦いの規則」(Serekh ha-Milhamah、従来の「戦いの書」)に属するとされている。⁹⁾それは現在4Q285と数字で指定され、その第5断片である。¹⁰⁾それはまた、この小断片が「戦いの規則」と密接な関係にあることを意味しており、このことはこの小断片を解読するとき無視できない。4Q285、断片5は縦40mm、横58mmの皮革紙で、小さな断片である。ここに6行の文字が並んでいるが、6行目は幾つかの文字の一部が残っているだけである。各行の文字は行の途中にあるもので、その左右にあった文字は欠損している。書体は前1世紀の終わりから西暦1世紀のはじめ頃の典型的なものである。ここでまず読み取れる文字を確認する。

1) 本文

写本断片の文字

- 1 ישעיהו הנביא וְנִקְנָפוּ
2]פֹּל ויצא חוטר מגזע ישי
3] צמח דויד ונשפטו את
4] והמיתו נשיא העדה צמ
5] ׀ ובמחוללות וצוה כוהן
6 ח]ללן] כְּתִיבָם] לן]

日本語訳 (／は「ないし」、「または」の印)

- 1] 預言者イザヤ・・・
2] 倒される。そしてエッサイの株から芽が萌えいで
3] ダビデの若枝。そして彼らは[]と共に裁かれる／裁きに入る[
4] 会衆の指導者は／を、彼を／彼らは殺し、[・・若]枝／[・・軍]隊[
5] ・と突き傷／踊りをもって。そして[]祭司は命じ
6] キッティ[ム]の死]傷[者ら]

第1行で読むことができるのは「預言者イザヤ」(יְשַׁעְיָהוּ הַנָּבִיא)という文字だけである。そのあと幾つかの文字がすり切れて残っているが、明白ではない。ただし、それは推量の手がかりとなる。そのためにまず第2行を見なければならないが、第2行では、「そしてエッサイの株から芽が萌えいでる」(וַיֵּצֵא חוּטֶר מִגֹּזַע יִשִּׁי)というイザヤ11:1aの引用が読み取れる。חוּטֶרの最後の文字レシュは消えているが、文脈から明らかである。この引用句の前にוַלとあるが、これはיְפֹל、「倒される」の最後の2字と思われる。なぜならイザヤ11:1直前の10:34がיְפֹלで終わっているからである。そこから、第1行の終わりから第2行にかけて、イザヤ10:34の引用があったのではないと思われる。またそこから第1行目の終わりのすり切れた文字はイザヤ10:34の最初の用語ではないと思われる。それはマソラ本文ではוַנִּקֵּףであるが、第4洞窟出土(以下4Qと略す)のイザヤ書注解1にもこの節の引用があり、そこではこの用語はוַנִּיקֵּפוないしוַנוֹקֵפו¹¹⁾である。そのすり切れた文字はこの後者として強いて読めるかもしれない。その意味は受動で、その主語(「森の茂み」)が複数であるから、最後に複数の語尾ワウがついていたかもしれない。第2行の終わりから第3行のはじめにかけての欠損に、まったく文字はない。第3行では「ダビデの若枝」(צֶמַח דָּוִיד)、
「そして彼らは・・・裁かれる／と共に裁きに入る」(וַנִּשְׁפֹּטוּ אֹתָם)は明白に読み取ることができる。そのあとから第4行のはじめにかけての欠損にも文字はまったくない。第4行の3語(וְהָמִיתוּ וְשִׂיא הָעֵדָה)は「そして彼らは会衆の指導者を殺す」とも読めるし、「会衆の指導者は彼を殺す」とも読める。そのどちらが正しいかは文脈を考慮して判断しなければならない。そのあとの文字はצֶמַחとも、צֶבַחとも読める。前者なら、第3行にも出るצֶמַח דָּוִיד、「ダビデの若枝」という語の一部と思われる。後者なら、・・・צֶבַח、「・軍隊・」という語があったと考えられる。第4行の終わりから第5行のはじめにかけて欠損は想像するしかない。第5行のはじめの文字メムは複数男性名詞の語尾であろう。そのあと文字は読めても、その最初の単語(מַחֲלֵלוֹת)の意味が明らかではない。多くの学者は「傷」、「突き傷」の意味で理解するが、「踊り」の意味で取る意見もある。そのあと「そして

[]祭司は命じ]・・・・」(וְצוּה כוהֵן)と読める。そのあと欠損が続く。第6行はほとんど文字は読めないが、ラメドの先端がまず2つ、離れて1つ見え、2つのラメドから חללִי 「死傷者ら」が推量される。その後幾つかの文字の上の部分が見え、そこから כתיים 「キッティム」と判読できる。

2) 本文の理解のために前提されること

明らかに読みとれる文字から欠損部の想定も交えて、この写本断片の理解を試みたい。そのためには、まずここで明らかに引用される聖書の本文そのものが何を言っているかを念頭にいれておこう。イザヤ11:1－9は、イザヤ9:1－6と共にダビデの子孫からメシアが出ることを告げる典型的な預言である¹²⁾。それは「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの新芽がふくらむ」(11:1)と始まるが、ここで「エッサイ」とはダビデ王の父のこと(1サム16:1－16、17:17、20、58など参照)、その「株」と「根」とは廃れた子孫のこと、そこからひとつの「芽」、「新芽」が出ると言われるが、これはイザヤ9:5で「生まれる」と言われる「ひとりのみどり子」、「ひとりの男の子」を受けているのであろう。この植物界から取られたイメージは命に満ち、平和な時代の到来を予感させる。この子は神の知恵と行動力、宗教性の霊に満たされ(11:2)、正義と公正によって「裁き」(11の3－4)、貧しい者を支え、悪人を「殺す」(11:4)と言われる¹⁴⁾。彼が実現する世界は、動物界のイメージを用いて家畜と野獣が共存し、子供がそれを導くと言われ、超現実的なものである(11:6－9)。

ここにメシアという表現はない。しかし、これが典型的なメシア預言であることを理解するために、時代をさかのぼって見る必要がある。メシアとは「油注がれた者」の意で、古代イスラエルにおいて油を注がれて王や祭司の役職についたのだが、その中でダビデ王(1サム16:13; 2サム19:22; 22:51; 23:1)こそ「油注がれた者」として特筆すべき人物であった。ダビデ王はその王家が永久に揺るぎないものであるという主なる神の預言者ナタンの託宣(2サム7:13、16、29、それに詩編89:2－5、20－38、132:10－12参照)を与えられたからである。しかし、前8世紀にダビデ王家が危機に瀕

し、そのナタンの託宣をなお信じるかの試練の時を迎えた。そのとき登場してダビデ王家の王にナタンの託宣を信じるよう、説いたのが預言者イザヤであった(イザヤ7:1-17参照)¹⁶⁾。そのイザヤが未来にダビデ王家から出て、その役職を果たす理想的な王の到来とその支配の性格を告げたのがイザヤ9:1-6であり、11:1-9であると伝えられてきた。そのようなわけで、イザヤ11:1-9はメシア預言として受けとめられてきた。

他方、死海文書によってわかったのだが、前2世紀の後半以降に生きていたその文書の持ち主たちは祭司なるメシアと王なるメシアの到来を期待していた(宗規要覧9:11、4Q証言集参照)¹⁸⁾。前者はアロンのメシア、後者はイスラエルのメシアと呼び、前者が後者に対して優位にあると考えられていた(会衆規定2:11-22参照)。祭司階級と信徒階級からなる同宗団がこのような二重のメシア待望観をもっていたとしても不思議ではない。また同宗団がもつ強い終末観も、そのメシア像に終末的性格をもたせることとなった。また同宗団の歴史と共にそのメシア像も変遷したようだが、イエスの時代にはそれらが重なって異なるメシア像が混在していたのではないかとも思われる。¹⁹⁾この宗団に見られるメシア像は、この宗団に限ってではなく、当時のユダヤ教に共通するものであったとも推察される。その色々なメシア像の中で、ダビデ王家から出る「イスラエルのメシア」の到来を証す預言として、民数記24:15-17、2サム7:1-14、詩編2:1-2、アモス9:11、創世記49:10と並んでイザヤ11:1以下も考えられていた(4Qイザヤ書注解1=4Q161断片8-10:11-24参照)²⁰⁾。以上のようなことを前提として、この小さな写本断片を読む必要がある。

3) 本文の解釈

第1行-第2行。「預言者イザヤ」は、おそらく「預言者イザヤの書に記されているように」(כַּאֲשֶׁר כָּתוּב בְּסֵפֶר יְשַׁעְיָהוּ הַנְּבִיא) というような導入句の最後の2語であろう。²¹⁾第1行の右端の欠損部にこれだけの語句は入りきれなければ、この語句は前の行から始まっていたであろう。この導入句のあと、引用そのものが書かれていたが、それは前に述べたとおりイザヤ10:34から

始まっていたと考えられる。実際に4Qイザヤ書注解1断片8-10:6-24においても、イザヤ10:34の解釈をして、これと関連させながら11:1を解釈しているので、ここでも10:34が取り上げられていたと言えよう。10:34は、直訳すれば、「森の茂みは鉄で断たれ、レバノン²²⁾は威厳あるおかたによって倒される」である。4Qイザヤ書注解1断片8-10:8によると、この「レバノン」とはキッティムのことだと言われる²²⁾。このキッティムでローマのことが考えられている。その注解で、そのキッティムが終末における戦いで打ち倒されると解釈されている。これを打ち倒すのは主なる神であるが、その神は御自分の側に立って戦う人々を選んで共に戦わせ、この戦いに勝利される。その統帥を預言者イザヤが告げたエッサイの株からでる「芽」に見ているのであろう。こういうことで4Qイザヤ書注解1でイザヤ11:1aの引用がなされているようであるが、それはこの写本断片についても言えよう。

ここでダビデ王家からメシアが来ると期待されているが、当時ダビデ王家の系図がどれほど知られていたか、問題であろう。ゼルバベル以来ダビデ王家が実権を離れて、すでに数世紀が経っていた。また、ダビデ王家から未来に王なるメシアが到来するという考えは忘れられ、死海文書が書かれた時代に復興したものだった。従って、現実には、どこの誰がダビデ王家のものか、わからなくなっていたのではないだろうか。²³⁾そこから逆に真のメシアならダビデ王家の子孫であるはずだと考えられるようになっていたのではないだろうか。従って、後述するこの宗団の指導者は、ダビデの血筋であることを証明できないが、メシアと考えられえたのではないだろうか。

第2行のイザヤ11:1aのあとイザヤ11:1bの引用がその欠損部に書かれていたかもしれない。²⁴⁾それは (וְנָצַר מִשְׁרָשׁוֹ יִפְרֶה)、「その根から新芽がふく」という句である。

第3行。引用されたイザヤの預言についての解釈がここで始まる。「ダビデの若枝」は、「これはダビデの若枝のことである」というような文の一部であろう。このように、エッサイの株から萌えでる「芽」を説明している。²⁵⁾「芽」と訳されるヘブライ語 חֹטֶר は、この意味ではここだけしか出ない。

これを一般に知られている用語で説明しているのである。それが「ダビデの若枝」で、そのヘブライ語 צֶמַח דָּוִד は、ダビデ王家の子孫から出るメシアを預言する 2サム7:11-14とアモス9:11を解釈した4Q詩歌集(4QFlorilegium=4Q174、I:11-13)に用いられている。²⁶⁾ またそれは創世記49:10に基づいてメシアの到来を解説する4Q父祖の祝福(4QPatrBlessing)に、前述の4Qイザヤ書注解1断片8-10:17にも用いられている。²⁷⁾ これはエレミヤの預言にさかのぼり(エレミヤ23:5、33:15、それにゼカリヤ3:8、6:12も参照)、ダビデ王家から出るメシアを指す用語として比較的広く知られていた。

つぎに、新しく文章が始まっているようで、それは裁きについて述べる。動詞「裁く」(שפט)は、イザヤ11:3-4で用いられ、ダビデ王家から出るメシアの行為として「裁く」(カル形)と言われる。その影響でこの断片でも裁きが言われているのであろう。しかし、ここではこの動詞がニファル形で、אָと共に用いられている。その原意は受動で「裁かれる」(詩編9:20;37:33;109:7)、再帰で「人と法の争いに入る」、「裁きに入る」(エレミヤ2:35、箴言29:9など)を意味する。ここで動詞の主語は複数となっており、それで敵対勢力が考えられて、その彼らが「裁かれる」と言われているのか、あるいはそれで味方の勢力が考えられていて、その彼らが「裁きに入る」と言われているのか、あいまいである。²⁸⁾ いずれにしても、この裁きで実際には法廷抗争ではなく、神の正義のための戦いが考えられている。その受動の意味の可能性も残しながら、再帰の意味の用例も珍しくないのも、これを優先させてよいであろう。そうなら、ここで終末における戦いに参加する光の子らが考えられていて、「ダビデの若枝」と言われるメシアとは、その光の子らの統帥のことではないだろうか。これが正しければ、אָのあと欠損部で彼らの敵対勢力が書かれていたはずである。

第4行。ここが最も論争されている箇所であるが、まず「会衆の指導者」(נְשִׂיא הָעֵדָה)の意味を確認しておこう。ここで「会衆」とは、クムラン文書を所有していた宗団が自分たちを呼ぶ名称の一つである。彼らはまた

「共同体」ないし「宗団」(יְהוָה)とも呼んでいるが、会衆のほうに女、子供を含むより大きな集団のように思われる。²⁹⁾その「指導者」、וְשִׁיָּאは、民の指導者としてエゼキエル書に頻繁に出る。そこでは、それは未来のイスラエルの王として(44:3; 45:7, 8など)、また未来のダビデ王とさえ言われる(34:24; 37:25)。死海文書における「指導者」は、そのエゼキエル書から取られた名称で、祝祷集(1QSb) 5:20、戦いの規則 5:1、ダマスコ文書 7:20、4Qイザヤ書注解1断片 5-6:3に出る。³⁰⁾この人物はその宗団の会員たちの中で指導層に属するが、祭司階級には属さない人物である(祝祷集 5:20-28参照)。つまり、彼は信徒階級の指導者である。彼は会衆規定(1QSa)において祭司なるメシアと並んで出るイスラエルのメシアのことであろう(2:11-22参照)。³¹⁾彼の任務は、祝祷集においてもイザヤ11:1-9に発想を得て描かれ、正義と真実をもって戦い、悪人を滅ぼすことにある。ダマスコ文書では民数記24:17にあるバラムの預言の王笏とは彼のことと言われる(7:20)。ここでも戦って敵を碎く活動が言われる(7:21)。これらの文書では将来終末の戦いにおいて共同体も軍隊として戦いに参加すると考えられており、「会衆の指導者」とはその軍隊を率いて義人に勝利をもたらし、悪人を滅ぼすと期待されていた人物のことであろう。

またイザヤ10:34-11:1の直前にアッシリアに対する神の勝利を告げるイザヤ10:24-27があるが、その注解のところにも「会衆の指導者」が出る(4Qイザヤ書注解1断片 5-6:3)。³²⁾従って、この写本断片の前に「会衆の指導者」のことが書かれていたと考えられる。³³⁾さらに重要なことには、祝祷集もイザヤ11:1-9に発想を得て「会衆の指導者」を描いている。それゆえ、この写本断片でもエッサイの株から萌えでる「芽」とは「ダビデの若枝」のことであり、それは「会衆の指導者」にほかならないと考えられていると確かに言えよう。

このメシア的性格をもつ会衆の指導者が「殺す」と言われているのか、それとも「殺される」と言われているのか、まさにここに論争の核心がある。ヘブライ文字 וְהִמִּיתוּ を、w^hēmitō と読めば「彼は彼を殺す」となり、w^hēmitū と読めば「彼らは殺す」となり、そのいずれも可能である。アイ

ゼンマンは「彼らは殺す」と読むべきだとし、その目的語は「会衆の指導者」であり、このようにメシアが殺されることが言われていると主張する。³⁴⁾これに対して多くの学者は、「彼は彼を殺す」の意味に取り、その主語を「会衆の指導者」とする。³⁵⁾その根拠として、まず「会衆の指導者」の前に、これが目的語であることを示す辞 וְיָהוּדָה が無いことを指摘する。これは決定的な根拠ではないが、「会衆の指導者」が主語でありうることを示している。さらにこれはイザヤの預言を解釈したものであるが、そのイザヤの預言そのものを見れば、エッサイの株から萌えでる「芽」は「唇の勢いをもって」、そのあと直訳すれば「悪人を殺す」(イザヤ11:4)とあることを指摘する。さらに同宗団によるこのイザヤの預言の解釈、4Qイザヤ書注解1でも、その「芽」は「会衆の指導者」と同一視され、キッティムと戦って勝利する軍を率いるものと考えられている。従って、この写本断片においても、第1行から第2行の欠損部で「レバノン」の名のもとに敵であるキッティム、つまりローマが考えられていたようでもあり、その「芽」と同一視される「会衆の指導者」が主語ではないかということになる。その神の側にたって戦う会衆の軍隊を率いる「会衆の指導者」が、ここでは「殺される」というより、「殺す」といわれていると考えるほうが、文脈上整合性がある。それはまた広く、戦いの規則と同じ展望の中にある。「会衆の指導者」が主語なら、その彼によって殺されるのは誰かということ、敵対勢力の頭であり、戦いの規則15:2にある「キッティムの王」³⁶⁾かもしれない。

もしそのあとの文字を「ダビデの若枝」と読むなら、これは「会衆の指導者」と同格として、「会衆の指導者、ダビデの若枝は・・・」と並んでいると理解される。しかし、「・・・の軍隊」と読むなら、ここに新しい文の始まりがあったであろう。ただし、ここで前の行に出る「ダビデの若枝」が繰り返されているというより、新しい文が始まっていたと判断するほうがよいのではないだろうか。³⁷⁾

第5行―第6行。第4行の終わりから第5行のはじめにかけての欠損部には、いかなる文があったか、想像するしかない。第5行の最初の文字ムは

複数の語尾であろう。そうなら、つぎの問題の単語だが、חללのプアル形ないしポエル形、ポアル形分詞と見て、エゼキエル32:26; イザヤ51:9; 53:5を参考に「傷」、「突き傷」の意味で取るなら、それと並行してその前に「打ち傷」(ננעים³⁸⁾)と書かれていたかもしれない。そうだとすれば、「会衆の指導者、ダビデの若枝は、突き傷と打ち傷をもって・・・彼を殺す」というような文があったかもしれない。他方、その問題の単語は、その語根をחולと見て、士師21:23; 詩編87:7、それに出エ15:20を参考に「踊る女たち」、ないし「踊り」の意味で取るなら、それと並行して前に「小太鼓」(תפיל) 、出エ15:20参照)と書かれていたかもしれない。その場合、第4行に始まる文は、「・・・の軍隊は、小太鼓と踊りをもって・・・」というようになっていて、戦いのあとの勝利の祝いが言われていたことになる。³⁹⁾この解釈のほうが、祝祷集、4Qイザヤ書注解1、戦いの規則を含む広い文脈にあっていてるのではないだろうか。

続いて「そして祭司が命じる」と言われ、祭司が登場するが、祭司階級と信徒階級からなるこの宗団にとって驚くにあたらない。その「祭司」(כוהן)のあと、4Qイザヤ書注解1断片8-10:24に基づいてהשםを補い、「高名な祭司」と読むか、戦いの規則2:1; 15:4に基づいてהראשと補い、「祭司長」と読むか、いずれも可能である。⁴⁰⁾その祭司が何を命じたのか、推し量るには欠損が大きすぎる。第6行の「キッティムの死傷者ら」は、最終的に打ち負かされる敵のことであろう(戦いの規則16:8; 19:13参照⁴¹⁾)。それをどうするよう命じているのかは、読み取れない。

結 論

まとめとして欠損部を補い、あいまいな箇所も優先すべき読みを採用して、原文を復元してみることとする。「そして」は文体上の理由で省く)

- 1 預言者イザヤ[の書に記されているように、森の茂みは鉄で断たれ
- 2 レバノン⁴¹⁾は威厳あるお方により]倒される。
エッサイの株から芽が萌えいで[、その根から新芽がふく。

3 ・ ・ ・]ダビデの若枝。彼らは[]と共に裁きに入り[
 4]会衆の指導者は彼を殺し、[・ ・ ・]の軍隊は[
 5 小太]鼓と踊りをもって。祭司[長]は命じる[
 6] キッティ[ムの死]傷[者ら

死海文書の中に「殺されるメシア」の記述があるのかないのか。まずこの論争がほんの小さな写本断片の僅かな文字の解釈をめぐる行われてきたということを確認した。その文字はそれだけでは、いかようにも読める性質のものである。それを正しく読みとるためには、これに光を与えてくれるほかの文書を的確に探し求め、それらと共に細心の注意を払って解読に努めなければならない。その際、色々な解釈の可能性を考慮しながらも、真実にいつそう近いと思われる解読を優先し、より確かな根拠が見つかる期待を将来に託すべきであろう。それは無理があったり、直接間接の文脈との整合性に欠けるものは差し置くべきだということである。

「殺されるメシア」の記述があるとするアイゼンマンの主張は差し置くべきものだということが明らかとなった。その主張は、この小さな断片にメシアが問題となっていることを見抜いたことで評価されるが、「殺されるメシア」の記述があるとするだけでは認められない。従って死海文書の中にも、またキリスト教以前のユダヤ教にもそのようなメシア像はなかったと言うべきである。

この論争をとおして、「殺されるメシア」というのが、従来どおりほとんどキリスト教固有のメシア像であることが、あらためて確かめられた。それがどこから来るかといえ、それはナザレのイエスからであり、とくにその十字架上の死と復活からであろう。⁴²⁾換言すれば、初期のキリスト教徒は、十字架上で死ぬイエスの中にメシアを見た。それはその死が何びとの予想も超え、人語を絶する見事な出来事であり、そこに世の救いの鍵が見えたからであろう。

註

- 1) Wacholder, B.Z., and Abegg, M.G., *A Preliminary Edition of the Unpublished Dead Sea Scrolls*, The Hebrew and Aramaic Texts from Cave Four, Fascicle One, Two, Washington D.C., 1991-1992.
- 2) Eisenman R.H., & Robinson, J.M., eds., *A Facsimile Edition of the Dead Sea Scrolls*, 2 Vols, Biblical Archaeology Society, Washington, 1991.
- 3) *The Dead Sea Scrolls on Microfiche*, A Comprehensive Facsimile Edition of the Texts from the Judean Desert, editor: E.Tov, Published under the Auspices of the Israel Antiquities Authority, Leiden, 1993.
- 4) *The New York Times* (Nov.8,1991), *The Times* (Nov.9,1991), *The Chicago Tribune* (Nov.11,1991), *The Independent* (Dec.27,1991) などに掲載されたと伝えられるが、直接確認したわけではない。
- 5) Vermes, G., The Oxford Forum for the Qumran Research Seminar on the Rule of War from Cave 4 (4Q285), *JJS* 43 (1992), 85-94; Bockmuehl, M., A "Slain Messiah" in 4Q Serek Milhamah (4Q285)?, *TyndB* 43(1992), 155-169.
- 6) Eisenman, R., & Wise, M., *The Dead Sea Scrolls Uncovered*, First Complete Translation and Interpretation of 50 Key Documents Withheld for Over 35 Years. Shaftesbury, Rockport, Brisbane, 1992. 4Q285については pp.24-29.
- 7) García Martínez, F., Los Mesias de Qumran, Problemas de un traductor, *Sefarad* 53 (1993), 345-360; Schiffman, L., *Reclaiming the Dead Sea Scrolls*, Jewish Publication Society, 1994, 4Q285については, pp.344-347; Vanderkam, J.C., *The Dead Sea Scrolls Today*, Eerdmans, Grand Rapids, 1994, 4Q285については, pp.179-180; Martone, C., Un testo qumranico che narra la morte del Messia? A proposito del recente dibattito su 4Q285, *RBI* 42 (1994), 329-336; Collins, J.J., *The Scepter and the Star*, the Messiahs of the Dead Sea Scrolls and the other ancient Literature, New York, 1995, 4Q285については, pp.58-60; 日本語で書かれた反論については、オットー・ベッツ／ライナー・リースナー著、清水宏訳『死海文書』その真実と悲惨、リトン社、1995年、163-178頁参照。ただし、きわめて雑な扱いで、主旨はわかるが、必ずしも文章は明白ではない。
- 8) 現在では、前掲の *The Dead Sea Scrolls on Microfiche*, PAM41708, 423070, 43325 に容易に見ることができる。前掲の Eisenman R.H., & Robinson, J.M., eds., *A Facsimile Edition of the Dead Sea Scrolls*, では写真標本409, 795, 1352。
- 9) Milik, J.T., Milki-sedeq et Milki-reša' dans les anciens écrits juifs et chrétiens, *JJS*, 23 (1972), 95-114、特に p.143。なお「戦いの規則」とは、いわゆる「戦いの書」の本来の名称。
- 10) 4Q285は、幾つかの写本断片からなっているが、問題の写本断片はG・ヴェルメシュによると第5、Eisenman, R., & Wise, M., *op.cit.* pp.24-29では第7とされている。この断片以外の諸断片は、この断片も共にその書体からも内容からもミリク

が指摘したとおり「戦いの規則」の書に属することを示しているということで、意味がある。それは第1洞窟出土の「戦いの規則」の書の欠けている結びを補うものと考えられている。しかし、これら諸断片は小さく、ばらばらで、その前後関係などその元来の結びつきや位置関係は明らかではない。従って、われわれが取りあげる小断片は、ほかの諸断片とは関連なく、それ自体で意味を追求しなければならない。

- 11) マソラ本文の $\eta\eta\eta$ は、第1洞窟出土のイザヤ書(1QIsa^a)でも確認されている。これは *w^aniqqap* と、ニファル形3人称単数で読まれているが、主語(「森の茂み」)は複数だから問題がないわけではない。これは主語を意味上単数として動詞が単数になっているのか、元来語尾をウと発音し、3人称複数で読まれていたか(defective writing)、あるいは主語を神としてビエル形3人称単数で「断ち切る」と読まれていたか、色々と考えられる。他方、4Qイザヤ書注解1(4Q161)では $\eta\eta\eta$ となっていて、ヌンとコフの間にヨドが入っており、最後に複数の語尾ワウもある(Allegrò, J.M., *Qumrân Cave 4*, 14Q158-4Q186, 1968, DJD V, p.13, fg.8-10:6 参照)。ただし、ヨドとワウは見分けがつかない場合が多いから、 $\eta\eta\eta$ とも読める。両方とも、ニファル形かプアル形(またはカル受動形)か、いずれにしても受動の意味をもつ。さらにこのヌンとコフの間のヨドが通常より上に書かれており、そこから $\eta\eta\eta$ と読むべきだという提案もある。これは、4Qイザヤ書注解1の文字がそれほど明らかなものでないことを意味している。
- 12) イザヤ11:1-9の解釈については、特に Wildberger, H., *Jesaja*, Kapitel 1-12, Biblischer Kommentar Altes Testament X/1, Neukirchen, 1980, pp.436-462; Alonso-Schökel, L., *Dos poemas a la paz*, *Est. Bibl.* 18 (1959), pp.149-169; Rehm, M., *Der königliche Messias im Licht de Immanuel-Weissagungen des Buches Jesaja*, Eichstatt, 1968.
- 13) 「株」(geza') は、イザヤ40:24(新共同訳では特に訳なし); ヨブ14:8(幹)に出るが、ここではヨブ14:8の「根」と共に、廃れて朽ちていくものを表す。「根」はまた子孫の比喻でもある(イザヤ11:10; 14:30参照)。
- 14) 「殺す」は、ヘブライ語 *hemt* の訳としては強すぎると思われる。これは、直訳すれば「死なせる」。従って、イザヤ11:4の当該箇所は新共同訳では「死に至らせる」となっている。
- 15) 旧約聖書におけるメシア思想については、特に Cerfaux, L., Coppens, J., *L'attente du Messie*, Brugue, 1954; Ringgren, H., *The Messiah in the Old Testament*, Chicago, 1954; Mowinkel, S., *He that Cometh*, Oxford, 1956; Coppens, J., *Le messianisme royal*, Paris, 1968; id., *La relève apocalyptique du messianisme royal*, Louvain, 1979; Becker, J., *Messiaserwartung im Alten Testament*, Stuttgart, 1977; Cazelles, H., *Le Messie de la Bible*, Paris, 1978; Karrer, M., *Der Gesalbte*, Göttingen, 1988参照。
- 16) イザヤ7:1-17については、H・W・ヴォルフ著、柏井宣夫訳『終わりなき平和』、日本基督教団出版局、1972年参照。

- 17) 死海文書におけるメシア思想については、その研究史に変遷があるが、その過程で重要な貢献をしたのは、van der Woude, A.S., *Die messianischen Vorstellungen der Gemeinde von Qumrân*, Assen 1957; Starcky, J., *Les quatre étapes du messianisme à Qumrân*, *RB* 28 (1966) 481-505; Neusner, J., Green, W.S., Frerichs, E., *Judaism and their Messiahs at the Turn of Christian Era*, Cambridge, 1987; Charlesworth, J.H., ed., *The Messiahs*, *Developments in Earliest Judaism and Christianity*, Minneapolis, 1992; Grunewald, I., Shaked, S., Strousa, G.G., *Messiah and Christos*, *Studies in the Jewish Origins of Christianity*, Presented to D. Flusser on the Occasion of His Seventy-Fifth Birthday, Tübingen, 1992; Collins, J.J., *op. cit.*, 拙著「クムラン教団におけるメシア待望観」、『世紀』5月号、1992年、84-91頁；同1月号、89-96頁参照。
- 18) 拙著、前掲論文、5月号、86-90参照。
- 19) 拙著、前掲論文参照。ただし、ここではスタルキに従ってクムラン教団におけるメシア待望観の変遷を紹介したが、その後の研究を考え、現在ではそれは単なるメシア観の変遷ではなく、むしろ積み重ねと見るべきではないかと思う。
- 20) Allegro, J.M., *op. cit.*, pp.13-15参照。
- 21) Bockmuehl, M., *art. cit.*, p.159, は例として4Q詩歌集1:15を指摘する。ただし *ka'āšer* の代わりに *'āšer*。
- 22) Allegro, J.M., *op. cit.*, p.14
- 23) Caquot, A., *Le messianisme qumranien in : Qumrân. Sa piété, sa théologie et son milieu*, édité par M. Delcor, Paris-Gembloux, 1978, 231-247、特に238-240参照。
- 24) アイゼンマン・ワイズのこの補足は正しいであろう、Eisenman, R., & Wise, M., *op. cit.*, p.29参照。
- 25) 「芽」(*hōṭer*)は、ここと箴言14:3(杖の意で)だけに出る。イザヤ11:1bの「新芽」(*nešer*)も、ここと、イザヤ14:19、60:21、ダニエル11:7だけに出る。
- 26) 4Q詩歌集は、拙著、前掲論文、1月号、94-96頁参照。
- 27) Allegro, J.M., *op. cit.*, p.14参照。
- 28) 受動に意味にとるのは Schiffman, L., *art. cit.*, p.346, 再帰の意味にとるのが一般的で、Vermes, G., p.88; Bockmuehl, M., *art. cit.*, p.164, n.26参照。この後者は、*spt* のニファル形が *'t* と共に出る箇所として1サム12:7、エレミヤ2:35、エゼキエル17:20:20:35、36(2回); 38:22、箴言29:9を指摘する。彼らはそれを、*They will enter into judgement with* と訳す。
- 29) 彼らは自分たちを、*yaḥad*「共同体」、*maḥānōt*「陣営」と呼んでいたが、それと並んで *'edāh*「会衆」とも呼んでいた。宗規要覧も、*serek hayaḥad*「共同体の規則」、会衆規定も *serek ha'edāh yiśrā'el*、「イスラエルの会衆の規則」が本来の名称。この会衆とこれに類する表現は、旧約聖書にある(出12:6; 民数16:9; 32:4など)。
- 30) 祝祷集は従来の祝福の言葉、その訳は日本聖書学研究所『死海文書』、山本書店、1963年、119-122頁、戦いの規則は従来の戦いの書、その訳は同書128-150頁、ダ

マスコ文書の訳は同書253—276頁参照

- 31) 会衆規定は、日本聖書学研究所、前掲書115—118参照
- 32) Allegro, J.M., *op.cit.*, p.12参照。
- 33) 興味深いことに、PAM43325の中の第5断片以外の第4断片（アイゼンマンによる
と第6断片）には「会衆の指導者」が3回書かれている。これによってもこの写本
断片群の共通性が示唆されている。
- 34) Eisenman, R., & Wise, M., *The Dead Sea Scrolls Uncovered*, p.29では、もう一
つの訳を可能だとしてカッコに入れて提示する。
- 35) Vermes, G., *art.cit.*, p.88; Bockmuehl, M., *art.cit.*, p.159など。
- 36) Vermes, G., *ibid.*, p.89
- 37) Schiffman, L., *op.cit.*, p.246
- 38) Vermes, G., *ibid.*, p.88
- 39) Schiffman, L., *ibid.*
- 40) Vermes, G., *ibid.*, p.88, n.9
- 41) Vermes, G., *ibid.*, p.89、ただし、1QM16:18とあるのは1QM16:8の間違い。
- 42) Vermes, G., *ibid.*, p.89、G・ヴェルメシュ著、木下順治訳『ユダヤ人イエス』、
日本基督教団出版局、1979年、230—232頁によると、ユダヤ教のラビ文献の中に、
終末の戦いにおいて殺されるヨセフの子とかエフライムの子といわれるメシアが出
るという。そのため、「ほとんど」という。しかし、そのメシア観もキリスト教発
生以前にさかのぼるものではない。